

菊地功大司教メッセージ

年間第16主日

2019年7月21日 高円寺教会

9:30 ミサにて堅信式

第一朗読 創世記 18・1-10a

第二朗読 コロサイ 1・24-28

福音朗読 ルカ 10・38-42

—— 冒頭、京都の事件に触れ ——

(加害者が) そこまで深い憎しみを抱えていた。

とはいえ、キリスト者として、神から与えられた命を生きているわたしたちは、どんな理由があるとしても暴力的に命を奪い取ることは許されていないということを、改めて強調しなければならない。主張しなければならないと思います。

亡くなられた方々には心から永遠の安息をお祈りし、怪我をされた方々、被害を受けた方のご家族、友人の方々を、神様がお護りくださるようお祈りしたいと思います。

人の命をいったいどう考えているのかと思う事件が、あとを絶ちません。このような事件に直面するたびに、キリスト者にとって命は神から与えられたもの、人間の命は神様の似姿として尊厳をもって与えられた賜物なのだということを、改めて繰り返し繰り返しこの社会の中で主張していかなければならないと痛感します。

人間の命が存在しなければ、そこにはなにも起こらない。人間の命があって、その命が生きられる社会であって初めて、営みが、良い行いがなされる。それは究極的に、神が最初にこの世界を創られたときに望まれた、完成した社会となること。

世界を最初に創造されたとき、神は何も考えずに適当にこの社会を創ったわけではなく、一番ふさわしいと思われる秩序に基いて、理想の世界をご自分で創られた。しかし、残念ながらわたしたちは、原罪が始まってから少しずつ離れていっているわけです。

神が望まれる世界をもう一度創り出してゆく、神が望まれる世界をもう一度手に入る、実現する。そのためには、人の命がそこになければなりません。そこに命がなければ、神の理想の世界を創ることができないのです。

人の命が大切にされること、命は希望なのだということを、わたしたちは繰り返し繰り返し、この社会の中で強調してゆかねばならないと思っています。

その命は、社会の中で生きてゆくにあたって、もちろんわたしたちはキリスト者として、それは一つの体を作り、一人一人は部分なのだということがパウロの言葉にあります。ローマ人への手紙、そしてコロサイ人への手紙には、キリストの一つの体を形作っているわたしたちは部分であると。体全体が足だったらどうする、体全体が指だったらどうするのだと。いろんな役割があって、その役割を一人一人が忠実に果たしてゆくから全体の一つの体が成り立つという考え方を、わたしたちはしています。

この与えられた命は、自分だけのために生きているわけではありません。自分の役割、与えられた賜物に従った役割を一所懸命果たしていくことによって、一つの大きな体をつくることに貢献して生きていくのだということを、常に思い起こしていかなければならないと思っています。

そこで、今日の福音のマルタとマリアの有名な話です。色々なところで様々語られていますね。

どうしてもマリアより、マルタの存在に目が行ってしまいます。マルタ、可哀想ですよ。一所懸命おもてなしをしているのにダメ出しをされたような、非常に可哀想な話なわけです。

有名なお客さんが来るので、一所懸命おもてなそうという立場に自分になったら、イエス様はなんてひどいことを言うのだ。マリア、働けよと、ここは議論になりますよ。しかし、イエス様はマルタがダメだとは言っていないんです。そうではなくて、イエス様は、必要なことはただ一つと言っているのです。必要なことはただ一つしかないのだから、みんなそれをしろとは言っていないのです。

つまり、マリアが選択した方が良くて、マルタの選択がダメだという話ではないのです。必要なことはただ一つ。誰にとってただ一つなのかというと、それぞれの人にとって、必要なことはただ一つなんです。

それぞれの人にとって必要なことは、ただ一つなんです（二回強調）

だから必要なことを選びなさい。マリアはマリアにとって必要なことを選んだ。しかし、あなたはあなたにとって必要なことを選んでいない。あなたにとって必要なことを選んでいない。（ここも二回強調）

マルタの何が問題かということ、与えられている役割を一所懸命果たしている中で、嫉妬心が生まれてくるんですよ。わたしばかりこんなに働いて、なんでうちのマリアは働かないの？と。他人に対する思いが比較をし始めるわけです。自分とマリアを比較する中で嫉妬心が生まれ、嫉妬心に囚われ、とうとう我慢できずに、何故わたしばかり働かなければいけないの？ということをしてしまう。それは、必要なことを選択していない状況ですよ。

イエス様がおっしゃっていることは、必要なことはただ一つ、一番ふさわしいことはただ一つしかない、と。それは何かというと、一人一人に与えられた一人一人の命に与えられている役割、この世における一人一人の命に与えられている様々な恵み、これに基いて最善な生き方を追い求めなさいということです。

また、その時によって何をすべきなのかは変わっていくのですから、ぼーっとして同じことを繰り返すのではなく、今、あなたにとって何が一番重要なのか、それに忠実に生きてみなさいということ、語っているように思います。

ですから、このイエス様が現れたタイミングで、マリアにとって一番大切なことは、イエス様の言葉に一所懸命耳を傾けることだったし、マルタにとって一番大切なのは、誰かと自分を比較するのではなくて、一所懸命イエス様をもてなすこと。お客様をもてなすことに専念することだった。

それが、その時の彼女にとって一番必要（大切）なことだったのに、様々なことで心が乱れてしまって、本当に必要なことに集中することができていない。このことにイエス様は注意を促がされているように思います。

そして、わたしたちにも、その大きなひとつの体をつくる部分として、一人一人に与えられている役割が必ずあるはずなんです。

なかなかそこに集中して生きていくことができず、様々なことで心を乱し、自分と他人との比較の中で思いを巡らし、思いに囚われ引きずられ、肝心な役割を忘れてしまう。そういうことが多いのだろうなと思います。

自分自身に与えられている役割っていったいなんだろうと、それを改めて振り返ってみる必要があるのではないのでしょうか。

そして、今を生きているわたしが選択すべき道は何かということに常に思い巡らせ、好きだからとか、やりたいからとか、心地良いからということではなくて、神様がそれを求めているのか、求めていないのかを考える必要があると思います。

神様はわたしにどんな道を示しているのだろうか？ 一所懸命祈りの内に知ろうと、努力していくことは大切な事だと思います。と思いますが、そう簡単にできたら苦労はないですね。すぐわかるようなことではないわけで、なかなか難しいですね。だから聖霊の助けがわたしたちに必要なのです。

今、教会はイエスが天に帰られた時に聖霊によって聖霊降臨の日から導かれているわけですがけれども、それは聖霊がわたしたちをスーパーマンにするということではない。力の源ではありません。

わたしたちが迷っているとき、判断がつかかねているとき、判断する助けをしてくれる、後押しをしてくれる力なのです。

わたしたちの中にみなぎって、常に特別な能力を与えてくれる聖霊ではない。わたしたちが一所懸命自分の力で何かしようとするとき、迷っているときに、後ろから良い方向に向かって押してくれる、助けてくれる、後ろから押してくれる力です。それが聖霊のお恵みだと思います。

そして堅信の秘蹟は、その聖霊の賜物を頂くということを目に見える形で、按手をし聖香油を塗ることによって体感すること。それがこの聖霊・堅信の秘蹟です。堅信の秘蹟を受ける人は秘蹟を受けることによって、具体的に神様がそっと後ろからそれぞれ一人一人を、正しい方向へ進むんだという思いを、支え、押してくれているんだということを感じていただければと思います。

その聖霊の支えに信頼しながら、置かれている状況の中で、神様は今、自分に何を求めているのか、どういう道を進めと言われているのだろうかということ、常に知る努力を続け、できる限りその与えられている役割に集中をし、大きなひとつのキリストの体の部分をつくる努力を続けていただきたいと思います。

また、そのミサに与っているわたしたち一人一人も、その聖霊の力を受けてきているのだと、今までも信仰の内にこの聖霊の力を受け続けてきたのだということ、心から神様に感謝しましょう。

そして勇気を持ってイエス・キリストの福音を社会の中で証ししていくことができるように、告げ知らせることができるように、神に与えられた命は大切なのだということ、言葉を言い行いで証しできるように、後ろから支えてくれている聖霊の力を改めて願いたいと思います。